

「広瀬隆」はこんな人でした

——広瀬隆著『日本の植民地政策とわが家の歴史』（八月書館）を読んで

甘蔗珠恵子（かんしゃ たえこ）

福岡県 曹洞宗 龍國寺

一九八六年、旧ソ連のチェルノブイリ原発大爆発事故の年、友人から手渡されて読んで、『億万長者はハリウッドを殺す』上、下巻、著者広瀬隆。「こんな、暗殺されかねないことを書く広瀬隆って、どんな人だろう……会ってみたい!」と、強く思った、その最初の印象。「広瀬隆って、どんな人だろう?」に三十年余りを経て、この本は、みごとに、すべて答えてくれました。

その驚きの出自から、三十五歳の時に書いて、羽仁五郎、永六輔氏らに絶賛された珠玉の短編小説までも、ここに掲載の短編、「逮捕」と、童話「水男の物語」は、広瀬さんの純粋でみずみずしい豊かな感性と表現力に震えるほど感動しました。

七十七歳の今日までの広瀬さんの稀有な活動と、そうさせた背景の思想と体験、哲学をも知ることができました。この一人の男性の自分史が、それまでの社会運動、市民運動を根底から揺るがし、絶大な影響を与え、市井の人々の目を開かせ、行動を起こして行くようすも分ります。

15章「党派を無視した反原発市民運動」、16章「日本の社会運動に対して抱いた違和感」、17章「私が考える運動哲学」は、拍手するほど共感しながら読みました。だから反原発市民運動は広がったのだ、と深く納得しました。

『億万長者はハリウッドを殺す』を読んでのちのある日、福岡市内を歩いていると、目に飛び込んできた「広瀬隆」の文字、電柱に貼ってあった一枚のチラシ、十月二十六日、その人の講演会の案内チラシでした。思いがけず早く、お会いできる機会が来ました。その当日、広い会場はいっぱいの人で溢れています。その人は精悍な感じの人でしたが、講演の第一声は柔らかく、静かな語り口で、意外でした。O.H.P.で次々と映し出される映像と、その解説に、聴衆は水を打ったように静まり返り、二時間余りの時間を聴き入り、咳の一つもないという不思議な時間、空間でした。もちろん、初めて聴くチェルノブイリ原発事故の実態の衝撃は、腰を抜かし、奈落の底へ突き落とされた思いでした。

それからすぐに原発関連の本を読み漁り、活動にも積極的に参加して半年、身心共に疲れ果て、重く、沈み込むようなからだを畳に横たえている時、身体の奥の方から、ウワー〜と、何かが衝き上げてきました。私は、思わず身を起こし、傍にあった机に向かって書いていました。「何という悲しい時代を迎えたことでしょうか」と。それから数日間、湧き出てくるままに、何も考えず、ほとんど何も口にせず、書き続けました。それが『まだ、まにあうのなら』でした。このタイトルは、大分の作家「草の根通信」の松下竜一さんがつけて下さいました。知り合ったばかりでしたが、松下さんの著作は多数読んでいましたので、私から直接お願いしました。本当にピッタリの題名で、その時の私の気持、そのままでした。広瀬さんの講演を聴いた衝撃が『まだ、まにあうのなら』を書くきっかけでした。

あのころの広瀬さんは、次々に出版される原子力発電の実態、真相を明かした反原発の本がどれも大ベストセラーになり、日本社会に大きな影響を与えて、社会現象となり、反原発のうねりが広がっていく中、広瀬さんへの誹謗中傷も激しく、広瀬さんはあの人たちに狙われ、殺されるのではないかと、私も、まわりの人達も本気で心配していました。いつも一人で、重いO.H.P.の機器や資料一式を担いで、全国津々浦々の人々の求めに応じて、現地に足を運び、学習会をしてまわっていらっやいました。

この本にも広瀬さん御自身が、何度も身の危険を感じられた場面が書かれていますが、彼らがなぜ、こんな「危険人物」を消さなかったのかと、今となって思います。何がはたらいて、そうなったのか——。

「国策」に抗うということは、戦前、戦中を思えばずいぶんやわらいだのだと思いますが、根本的には変わって、私のような、何の力もない主婦でも、「公安のブラックリストに載っていますよ」と、知人の警察官に注意され、伊方原発の出力調整実験反対の署名集めを大分の人達と全国に呼びかけ、大々的にやっていた時には、盗聴もされていました。そのとき私は「ヘ〜盗聴って本当にあるんだ、こんな名もなき一般市民にも〜」とびっくり仰天し、自分が「何」と対峙しているのかを、あらためて知らしめられたことでした。

広瀬さんの書く本は人々を煽っているという批判を、反原発側の学者さんからも聞いたことがありますが、煽っているのではなく、秀れた語学の才能を駆使し、自ら世界の文献、資料、情報を、時間をかけて徹底的に調べあげて、日本の誰よりも早く、その事実を知って、原発の実態や、世界の不正、不条理の原因を追求し、明らかにしたことを精力的に執筆し、私たちに知らせて下さったのです。広瀬さんの文章には人を動かす力がありました。広瀬さんの、このような一身を懸けた警告を無視し続けた揚句、2011年、福島第一原発の大惨事は起きました。無念でなりません。

この『日本の植民地政策とわが家の歴史』の一冊は、中味がとても濃いです。広くて深いです。ですが、ページをめくるや、ぐいぐいと引き込まれてゆき、休む暇も惜しく、読み通してしまいました。「世界が今、こうなっているのはなぜ?」誰もが思うこの疑問に、広瀬さんは答えています。自ら考える確かな資料を提示してくれています。

新しく出版されたこの本は、広瀬さんの集大成というべきものです。

「広瀬隆」はこんな人でした。